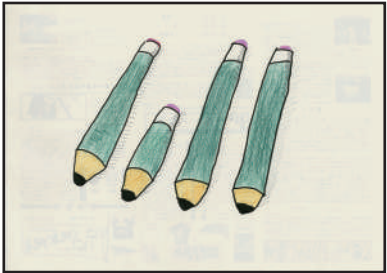




花鳥風月

5月2日、というとなんの日なのかご存知でしょうか。そう、えんぴつ記念日ですね。えんぴつ、と聞くだけで鉛筆削りを開いたときに鼻をくすぐる香りを反射で感じる人も多いでしょう。えんぴつは今や私たちにとって、絵を描くときにしか使わない、そんな遠い存在になってしまったように感じられます。しかし、私たちがえんぴつを愛用する小学生として過ごした期間は6年間。今、高校3年生の人でさえようやくトントンです。えんぴつ。その言葉にはDNAに結びつく強い風情があります。削ってくることを忘れ、ものすごい太さの字を書いた日。えんぴつの筆跡特有の急に太さが変わる瞬間。筆者がここで鉛筆をくると返したとわかり、筆者の生活や息遣いまでもが感じられます。



1564年にヨーロッパで発明され、1887年に日本で初めて製造されたえんぴつ。これから先も、鉛筆を懐かしむ心は受け継がれるでしょう。でも、私個人は小学校のシャーペン禁止ルールは悪習、という意見なので早いうちに消えてほしい心です。()



今回は、図書館に新たに設置されたコーナーについて紹介します。

お花見しましたか？

もう桜が散り始めているのを見て、「ああ、今年は花見せずに終わっちゃったなあ。」「また花見したいなあ。」と思っているそのあなた。ぜひ、本の世界でお花見をしてみませんか？

現在、図書館の入口すぐのところに桜コーナーが設置されています。「桜」という文字がタイトルに含まれてる本を集め、「ドラゴン桜」を筆頭に様々なジャンルの本が楽しめます。是非、3階図書館まで足を運んでみてください。()



↑新設した桜コーナー



どのページを開いても色、色、色。目的の配色があっても、どこかで新しい「好き」に浮気してしまいます。そんな本書は私が考える月高図書館内で1番のデザイン本です。それは本書が「雰囲気」を読める本であることに由来します。描かれるパターンや写真、それらに関連する話題、エッセイがあなたの創作イメージを膨らませる魔法の本なのです。

毎日忙しい新学期、学校生活に手一杯で「創作」が大好きな自分を忘れてはいませんか。本書はそんな自分に再会できるきっかけとなるでしょう。()

『配色アイデア手帖』

『べつに怒ってない』

やろうと思ったけどできなかったことや、やる前に考えてしまったこと。不毛で豊かな123本のエッセイ集。考えすぎる生活をしていると「こんなことを考えているの自分だけか？」と思うような澱（おり）が心の中に溜まっていきます。かくいう私もそんな人間で、ハートをただ蝕む日々を送っていました。しかし、そんな生活はこの本を読んで変わりました。本書ではそういった澱でできた文章が連ねられていて、人生の孤独だった部分に仲間ができます。まるで処方箋のような一冊。新学期の不安でできた傷はこの本で癒してください。()



このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

過去の記憶を失い「彼岸花が咲く島」へ漂着した少女は、島に住む游娜（ヨナ）に宇実と名付けられる。見知らぬ文化や言語に戸惑いながらも、宇実は最高指導者の「大ノロ」に期待され、「ノロ」になることを決心する。しかし宇実と游娜は、今の「島」に疑問を持ち始める。なぜ男性は「ノロ」になれないのか。海の向こうに存在する「ニライカナイ」とは何か。「島」の文化に隠された暗い歴史・凄惨な過去が、次々と明らかになる。



『彼岸花が咲く島』
李琴峰 著/
文藝春秋

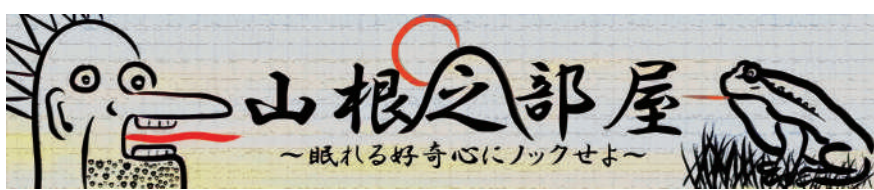
普通のファンタジーかと思いましたが、国内外の紛争や男女格差問題を想起させるメッセージ性の強い内容で、非常に考えさせられました。

また、情景描写が精妙であり、読んでいてワクワクする本でした。()

行ってみたい度

衝撃度

本の難易度



ふと「21世紀子ども百科」を開いてみた。パラパラとページをめくると、「ビルディング」のページに辿り着いた。目に留まったのは「ゆめの超高層ビル計画」。21世紀子ども百科から得られた懐かしい「ゆめ」という言葉の響きは、忘れていた何かを呼び起こした。言葉にできない興奮。広げた図鑑に写るビルはすべて「ゆめ」なのだ。今回はそんな「高層建築物」を「ゆめ」と共に君に伝えよう。

ロンドン塔(英) 1100年 高さ:27.4m

「塔なのに27.4mしかない...。」Z世代の君たちの狂った感覚を修正しよう。1100年という時代を想像してほしい、日本は平安末期。それはそれはもの凄い高さではないか。

ロンドン塔は現在のイギリス王室を開いたウィリアム1世によって首都の防衛のみならず、民族的威厳を示す目的で築かれた城塞だ。木や土、レンガで築かれていた当時のイギリス城塞とは異なり、ロンドン塔はフランスから輸入した大きな切石を積み上げて建造されている。また、ロンドン塔はイギリス王室における数々の悲劇により命を失った人々の亡霊が今もさまよっていることで有名だ。例えば、12歳で即位したエドワード5世は、叔父によって王位を奪取され、10歳の弟とともにロンドン塔に幽閉され殺害された。当時の人はそんなロンドン塔をどう見ていたのだろう。堂々と聳え立つ恐怖の象徴というイメージは、ただでさえ大きいロンドン塔をさらに大きいと感じさせただろう。

ロンドン塔は米粒大！！

ケルン大聖堂(独) 1880年 高さ:157m

ケルン大聖堂はドイツを代表するゴシック様式の建築物だ。ゴシック建築の最たる特徴は「天国へ近づきたい」という信仰心からできた天井の高さと、重厚な石造りである。ケルン大聖堂も大部分は石材から構成されている。こんなにも大きいのに、建築はすべて人力で行われた。当時はクレーンが存在しないため、回転車の中を走るハムスターのように人が中に入って、回することでロープを巻き上げ、高所に石材を運んでいたのだ。サグラダファミリアが170mであることを考えると、当時の技術からは考えられない高さであり、市民の信仰心の強さが伺える。

エンパイアステートビル(米) 1931年 高さ:443m

1884年まで世界一を誇る高さであったケルン大聖堂も、たった半世紀の時間で決して高い建物ではなくなってしまった。20世紀の幕開けとともに、ニューヨークで高層ビル建設競争が始まったのだ。

エンパイアステートビル(以降ESBと表記)も高層ビル建設競争のなかで“世界一”を勝ち取るべく建設された高層ビルのうちのひとつだ。そんな一面を持つESBであるが、「自由」の象徴的存在とも言えるだろう。モダニズム建築が世界の共通言語であった当時、装飾は無駄なものとして排斥された。その中で、ナショナルアイデンティティの象徴であるアール・デコという様式が取り入れられたESBには、多くの鮮やかで立体的な装飾が施されている。その点において、高く聳え立つESBはアメリカ人の国民意識を高める上で重要な役割を持ったのだ。

このように、私達人類は高いものに様々な「ゆめ」を抱き続けた。威厳や信仰心、国民意識のそれぞれが行き着いた先が「高さ」であったのだ。その点を踏まえると、刻々と移り行く“世界一高い建築物”を見るよりも、過去を想像し、当時の高層建築物を見ることのほうがとても意義深いように感じる。

21世紀子ども百科は今回の山根の部屋への案内表示となった。読後の興奮が抑えきれなかったのだ。このような児童向けの図鑑は、大きな文字と印象的な図から、すべてのページで興味を持てるように工夫されている。鼻息を荒くして、ページをめくり続けるのだ。本を閉じた時、溢れ出る好奇心はあなたの人生をより豊かにするだろう。()